

う、小女が墓參りの時、墓の狭くなれるとを告げたので有るから、舍利棄てた處も知つて居たに違ないけれども、寺坊の比丘等に口止めせられて居たらしい吾が東京より來ぬ前、親屬が調べに行けるととき、此老爺何も言はずりしとの事、有つたそこで右の小塔を吾手で取除け、鐵もて土を掘れば壺が出て、中を見れば舍利を以て満して有る、其中に二箇の銅製の筒あり、鑄こめた字を見れば青錆着て不明なれども、水以て洗ひ清め、祖先の法名現れ出でたから、確に頭舍利はとも角取收められたこと、で思出たとは、吾極て幼き時、祖母吾に語つて、中古の祖先の頭舍利は銅器に納めて葬りたるが、錆腐らねば舍利塔の下は代々入れられた銅器が満ちて、後に又新しい舍利を入れるとが出来ぬ故、後には木製器に盛りて塔穴へ葬り入れる事となつたと云へり、今現其等を見れば、榮尾と書いた母も、又父も、又銅器の事を吾に語れる祖母も、又祖父、弟、妹等も

皆此等の中に在ると覺り、斯く「人手に取つて投られた」と云はるゝ迄、略しき取扱をせられたは、能々吾徳薄く孝の足らざるを覺え、人々の見るをも厭はず、大聲あげて吾は大啼に啼いた。

繼母の死を豫知す

「特筆大書」を想起こさせた幻に出でし彼の、大々筆の事は、是で片付いたと心を安んじた然るに、豈圖らん、復大事が起きた。

事は何同じ年の十二月二日午前三時頃、吾小女夢の中に庭前一面に白い蓮華咲出で、之を手折て床に生けたりと見、翌朝祖母(吾繼母)に之を談る、祖母は少女に告て、其許畫に上達して有らば、蓮華を書き佛像の後に掛けたいと云へり、次で三日、又午前三時の夢に、祖母厨にて倒れ、小女力を出し、背に負ふて座敷に連れ來り、臥床に寢したりと見たり、其朝床

を離れて何等異變ことは無かつたが、少女は祖母の寢姿甚だ小さく見
 らるゝとて、度々腰を曲げ斜に之を見つめなごせるを妻見て怪み何事
 ぞと問へば、祖母御姿甚だ薄く思ますと答へた又次の四日午前同じ
 く三時頃京都の墓地へ参りたりと見る其夢を見たる時刻と遠からず
 少女厨の方に音響きたるを聞いて行き見れば、老母神佛に供へんと厨に
 水汲に行き倒れたので有る少女大聲あげて吾等を呼ぶ何事なりやを
 告られ、家内皆走り行き一同も大に驚き倒れたる老母を連れて寢床に
 臥さした老母此日より數日の間安然臥て居て何等苦痛を訴へず常々
 神佛に廻向けするを此上なき樂として居たるに因るか終微笑みて
 多くを語らず遂に其月八日自ら瞑目此世を去つた棺に入るゝ迄口尙
 微笑を含みて相を變ずあつた。

前に大きな筆を見て「特筆大書すべき事有るべしと思へりし事は舍

利放棄ての大事と成つて、何事も終れりと思ひ居たりしに、又此大事起
 れり始め大筆を覗いた時には、今年には老母世を去るべきかと思ふたが、墓
 地の事が有つたので、夫で事落着きたりと心安く日月を送つた然るに今
 又「特筆大書」と連想する事起たりあの筆は、まことに大きく有つたから、
 舍利の事件と、此事との二つを含めるか、將たごちらかの一つを徴めし
 たものか、或は吾妄想か、今に判断は出来ぬともかく筆見た事が幸わる
 き徴になつたは奇しい事有る。

筆を幻に見た明治四十三年は斯の如くで有つた然るに又驚いた事
 が今年生つた矢張筆で有る次に申します。

畏多き事を幻の大筆豫報す

本年四月九日のこと晝の中又眼の前に大筆が現れた試に眼を閉ぢ

畏多き事を幻の大筆豫報す

たるに筆は消もせぬ又眼を開く同じく去らず再三再四眼を開き又閉
 づれども執拗去らぬ其上は頓著けず打棄て置いたが其中何時か消滅
 せて又跡も無し其頃妻微恙ありて寢に就り吾は想像ふた本年妻も世
 を去るかと思翌日午前の間絶えず大筆が眼の前に立て居る又執拗見
 えて容易くは消へぬそこで又之を相手に爲す打棄置たがいつと無く
 見えす成つた然るに午後又出現た今度は筆毛稍黒色を帯びて中央よ
 り曲り折れては立上る此筆毛の上下への運動幾度かしたが例の如く
 棄置く中に見えず成つた何等の不祥事吾を襲ひ來るやと時々思ひ居
 たるに眞に以て畏多き事こそ起りたり十一日午前二時十分
 皇太后宮陛下崩御まします天の下八百萬國民謹み畏みて哀み奉る
 此時吾始めて日々吾眼前に現はれたる筆は此國の大不幸事有る可き事
 を徴したるなりと思へり嗚呼哀いかな予は取るに足らぬ微賤民草の

一葉に過ぎざれば御悼悔の辭申出るも憚有れど位階を賜り居れば黙
 止は不敬彌畏み謹み哀悼みの意を敬い書きて九重の大宮へ奉りたり
 嗚呼これ吾爲に本年の特筆大書にて有りけりあなかしこ。

幻の時計恩謝を豫報す

同じく明治四十三年七月二日東京外國語學校生徒より書翰が來ま
 した明日伺ふから差支無くば宅に居てくれとの事です此手書を讀ん
 で居た時其紙の面に金時計金鎖金こんばすが見えた書翰を卷納めて
 矢張眼の前にちらくそれが見えます何故かと思ふて居ました。

さて翌日學生諸君の代表で有るとして四人來訪くれられ美しき筆跡
 で學生諸君の名を連ねた書翰に添へ一品の贈物とて見えた予職
 に在る中教授甚だ行届かざりしにも係らず其書翰は極て慇懃な心を

幻の時計恩謝を豫報す

こめた、感謝状で、恩に謝ゆるとして時計鎖「こむばす」を贈ると云ふとで
す。是は實に意の外で有つた其贈品を見るに、如何にも眼の覺める如き
男らしい品々です。此時昨日讀める手翰の上に眼に映れる時計を始
思當つた。

扱こゝに前日見たのと今見たのとの間に違ふとが有る。そは如何に
と云ふに、贈られたる時計鎖は赤銅である。赤銅で有るから金は云ふ迄
も無く混入して有る。又其裏蓋に「謝恩」の二字が金象眼で有る。又裏蓋を
開き見ると其年、即ち犬年で有つたから、戯れ居る小犬二つが金と銀と
で象眼に爲て有る。「こむばす」は全部金で有る。實物と眼に映つた時計及
鎖とは色は違ふが、赤銅は金と銅と合せたもので有るから、金と見えた
は間違ふて居ぬ。又時計鎖は通例金銀の外一寸心附ぬから、心の表に現
はしたとき、金と定めてしまふたらしい。手に取ては燦爛した黄金色よ

りも此心きいた、殊に日本古來特色、合金なりと外國でも嘆美へらる
、赤銅の時計こそ誠に心ち好く、今以て日々愛で用ゐて居ます。

扱此時計が前日見たと云ふは何故かこれも偶然と言へば言へ併し
手に取ては、そうとは思れぬ道理が有るので、予は平生生徒に深く満
足はすことの出來ぬを能く心得て居ながら、敏からぬ吾なれば思ふ如
くに成らぬを常々遺憾に思ふて居ました。然るに右に云ふ年、二月の一
日、辭表奉りて後、生徒諸氏は足らぬ吾をも留任よと勸告を重ね、最後
には非常ぬ手段を執るに至つた。此事は吾口よりは世間に憚りて申憎
き事ながら、一つには方今や青年の腐敗を打歎く聲四方に聞かるゝに
も係らず、爰に熱きつたる情義溢れて、身を割く青年一團有るを世
に知らしめん爲め、二つには心が心に傳はる不思議例を説示さん爲め
有し儘の事を申します。

幻の時計恩謝を豫報す

予が聴を辭くを堅く申出たるを見て生徒等は遂に腕の脈を切割
 き生血を絞り紅色なせる血汐以て哀願文を書くに至りました予は之
 れを見て語も塞り胸も裂ん計りの思をし涕進しりて禁まらず良久
 間生徒等と諸共に聲を發して泣きました吾如き取るに足らぬ者を斯く
 迄に思はるゝは身の榮譽なれども去れども留任る心を翻す能はざる
 理由有るを如何にせん世には難有き此厚き情節は何時迄も肝に鐫こ
 み忘るゝとは無れども遂に心を鬼にして此人等の眞をこめた志に
 背きました斯う云ふ成果で有るから定て吾は恨まるゝなるべしと思
 ひ居たるに前に申した紀念物を贈られ何とも謝意を表す辭も有
 りません前日書翰讀める時幻に時計を視たは全く生徒諸氏の眞心
 が書翰を通して予に傳はつたもので以て心傳心る作用で有つたと思
 ひます。

吾経験て來た事は數々有るけれども斯んな事を書きならべては經
 験を常々仕て居る人から見れば有觸れて殊さら予より聞くに及ばず
 と思はれましようまた斯う云事を信うけぬ人から見れば予が虚妄を
 構へ世に誇らんとする者で有ることも見えましようけれども予信取る
 處は誰にでも斯う云ふ事は有るのであるが多くの人は夫を心づかず
 に居ると思ひますそこで予の経験た事は是迄として外の人の経験れ
 た事を一つ申します。

榎村男爵に紫雲吉徴を示す

前の行政裁判所長で有つた榎村正直男爵は久しく京都府知事とし
 て彼の府の爲には大に盡された其中教育の事には最も力を入れて丹波
 丹後の山奥迄小學校の生徒を一年に二度草鞋徒歩で自から誠驗に出

榎村男爵に紫雲吉徴を示す

られた方で佛國政府から行政の知事と云はんより寧ろ教育の知事と云ふべしとの讃辭を以て勳章を贈り來たてが有る。

此方が行政裁判所長となられたは其後で有る或日座敷の縁側に居られた其時庭に紫色の雲が此上無く美しく變遷きて容易くは晴散らず久しく目を附眺め居られたが紫雲左右と浮き流れ上下へ浮き又沈みて消去らずそこで家族の方々を呼びあれを見よとて共々眺められたすると宮内省より呼出し有つて男爵を賜はると成つたと云ふとを今の横村男爵から承はりました斯う云ふとを世間に言ひ觸らすは今の男爵の好まれぬ處と心得ては居ますが事實のと有り目出度い事で有るから敬ひを缺くとは思ひながら聞いたことをお傳へ申します。

三摩地治病

老人の火行

人生れて死ぬるに至る迄何なり身の病に罹らぬ者は無い輕きは風邪より重きは肺の病其外色々の疾患に侵され死なぬにしても日々身の自由ならぬ憂に遭ふとを免れず去れば此苦難を免んとて有らんに限り心を盡し或は藥を服み或は醫士に頼る場合に依りては治療はするが必ずしも決らず身終る迄長き年月藥醫の世語に成りながら心の中に少しも喜も樂も有ると無く月日を送る者世にいと多し。前に度々云へる如く人は形質のみに心を注てそれを離れるとが出來ぬ形質は因縁との相合ふて暫く幻となつて現れた者で有るも又申しました又此幻を吾に知らずは眼耳鼻舌身で有るが其五つが又完き物で無く虚妄ばかり吾等に報て居るとも度々申しました即ち

五 官に依り外の事が身に觸るれば心が夫を知ると云ふが實は知るのでは無い痛し痒しと思ふは身が矢張虚妄を報て居るので有る又身とは云ふが身の中の神経でそれが状態を變へる度に痛いと痒いと思ふ若し心が外に在れば痛みも痒みも知らぬ此事も前に申しましたそこを能く讀んでもらひ度い一口に言へば痛いと思へば痛くなるそれを心に掛けぬ習をすれば遂には痛を感えぬ身となる。

今爰に嘗て實驗を爲た事を讀む人の参考に供へます明治四十二年の夏で有りました仙臺より東京に參つた藝仙人と呼ばれる、片田源七と云ふ其時六十八歳なる老人が火の中の業する評判が高かつたから、心象會で試験することに成つて會員幾十名席に出で、右の老人を試験しました。

老人先づ高壇に立て會員を背にし、掌を合せ、大聲で祈禱を始めた其

唱語は老人自分口より出まかせの文句で、神々の御名も出たが、商賣繁昌迄も號んだ面白祈で有つた是で本人は眞面目で有るそれが終る時直に火修行に取掛らんとするからそれを止めて老人の身體検査を爲ました予等二三人は壇に登る前、老人が吾等の休息部屋に居た時能く手足なご検めたので有るが、會員の中には細密に検査を爲さんと欲する人も往々有つて、醫學士森田正道氏も居合はされ、老人の手足手を検査られた老人が通常の人と異つた點は少しも有りませぬ此人六十歳迄は野仕事をして居た上、老人の事で有るから、手掌、足底の皮膚は少し強ばつては有るが、之を壓へ見るに、柔軟な弾力を失なはず手の甲の皮は、老人だけに皺高けれど、之を延ばし見るに平滑となる、迎も火に焼けぬとか、刃の徹らぬなど云ふ皮膚では無い殊に其皮膚の柔軟を證す可き點は、此程公會で修た節、負傷したものと見へて、癒残りの刀傷

が幾個も附いて居た一つは凡そ八分程長く四分程の幅で表皮が未だ出来て居ぬから淡紅色の薄皮が見られ痛かる可く見えたが老人事無き状態で居た文額も少し皺は有るが物を打當て傷が付かぬと云ふ皮膚では無い。

扱始めに修たるは熱湯の中に沈めたる茶碗を取出すので有る釜の上口直徑一尺許なるに溢れん程水を満し二尺角の火鉢に一杯の火で煮沸し置いた此釜も火鉢も茶碗炭火も皆予等の會で備へたもので老人が持來た物では無い火を作り湯に沸すも皆會で世話したので有るから聊かも手品の如き秘し種有る譯では無い湯が煮上り湯玉を踊らせた時老人は「や」と掛聲して中の茶碗取出し壇の床に置く湯は碗に満ちたまゝで有る老人の手を驗べるに何等火傷の痕を留めぬ此時森田醫學士は自から沸湯に五指を入れんと試みると一兩二回で有つた

がそれが爲に火傷して皮が爛れた苦痛の様子を見た老人は、わしが癒して上げよと幾度か云ふたが、森田氏は之を諾がはなかつた老人少しも構はず、又直ちに釜の傍へ行き茶碗を取出して壇の上を往來し會衆に向て差し出し、又釜に入れ暫くしては又取出す斯くすると幾度か忘れたが、餘り造作無く取出し押入れするから見る者にも出來る考へで、會集の中には壇に登り之を取出さんと進み行いて沸立つ湯の中に一二の指入れんとし、火傷したから恐れて下る人も有つた老人の手を後に能く驗べたが少しも爛れた處は無い皮膚の色も變つて居ぬ手掌の切傷も前と同じ事で何等苦痛の徴は見えぬ。

次には釜を取上げ大火鉢に山もりに積たる烈火の中へ老人飛込み火の中で飛上り飛下り、幾度か斯くして火の外に出る會衆に何か口をたゝいて又火の中に入りて飛上り飛下るこれも幾度か繰返した尤

も火の中に静止るとは爲なんだが、飛上り、飛下る度に足裏に火の塊が幾個か附着て、火を出る時には火も著て出る。それを床の上で、そりりそのりと軽く足すりして落し、火は床にころがる。二寸許の火を拾ひ、手の掌に載せて五つの指で包み、壇の上を左右に往來し、誰か之を受とれど云ふ、誰も出ぬ。そこで火を持ちながら壇を降り、會衆の彼處此處へ廻り行き、誰か之を取れと言ひつゝ、廻り已めて其儘又壇に登り、火鉢へ還す。此間の動作少しも周章す、人々の驚き見る状あれば、又それに乗せられ同じ事を繰返す。見て居ては不思議とも思はれぬ。程面白く人々は笑ふて見て居た。舉動があまり事無く有つたから、其次には會の人が持來つた刀二本を取り、色々の事をして見せた。刀を上向けにして他人に床にて持たせ、老人其上に裸足で乗り、力を入れて踏む事などは誰にも出來るかとも思はれんでも無けれど、さて誰が試みんとする人は無か

つた足の裏にも切痕は幾個か有つたが、それは外にて檢の時、刀の足に踏まるゝ折、持つ人が引いたので有らうと見られた。そんな傷有るにも構はず、此夜又刀踏の業を爲して、何とも心にかけて居る状が無かつた。是ぞ大なる神通力と云ふ程のとは無いが、ともかく心には強く信ける處有つて、傷痛などを心に構はぬを習ひ込んだもので有る。聞けば炭燃焼なども爲たらしい。其頃山の中で仙人に出會ひ、何か教へられたとか言ふと、有るが、眞實は判らぬ。たゞ煮えて湯玉の踊る熱湯を何とも心に懸けず、火の足に著くをも構はぬ處は、全く心の持方によるのである。

普通の人は身體を餘り厭ひ過ぎる。是は矢張り迷で有る。斯く云ふ予も衛生もると云ふと、付ては尋常ならぬ養生かたを爲た。其結果は大患に罹つた事は前にも言ふて置きました。

度々申しますが人の云ふ心は眞の心では無い眞心は宇宙に満ち互
 る不思議き力と働の有る者で有る人が心と思ふて居るものは實は心
 で無く心に映つる影で有るとも既に申しましたそこで眞心が眼耳鼻
 舌身を使ふ時には眞の自由が出来其反對に影心のする儘に任す時
 は身體がそれを使ふととなるそこで人は心が身體を支配ると言ひな
 がら常に身體が主人と成て人の所謂心は甚力弱いものとなる心が
 眞に身體を支配するならば如何なる場合でも身體を自由に使はねばな
 らぬ然るに身體が弱くなり又病に罹る時心がそれに従ふて憊むと云
 ふは何故で有るか爰を能く考へてもらひ度い人々の言ふ處に依れば
 或時は心が勝ち或時は體が勝つと云ふとで甚だ判らぬと有る心が
 體を支配ると云ふ上は如何に體が弱くなつても病が有つても心は之
 を退ぞけ弱きにも病にも打勝たねばならぬ弱き體も強く爲し病有る

體も壯健にするので無くば心が體を司るとは云はれぬでは無いか
 然らば心が體より強いのが眞か體が心より強いが眞か云はずとも
 心が體より強いとは上に度々言ふた處で分りませう然るに體に病有
 る時は人々は心の體に勝れたるを忘れて心を體に劣る弱きものと
 思ふ是亦大きな迷では無いか其迷が又しても嗽々申す眼耳鼻舌身が
 虚妄を報げるとを思はぬからで幻影と云ふ僞心を眞心と思ふ迷で
 す。

人が此僞心の爲に病に入る丈では無い生れて死ぬる迄に諸の煩惱
 を心に懐くも矢張り僞心で其惱まざる、心と云ふも同じく僞心で有
 つて眞心では無いのですそ云ふと僞心一つで兩の作用を爲て居るか
 と問ふで有ろう答へて曰ひます、全く其通りで此僞心は二つの異つた
 働を爲る丈では無い殆んど同じ時に敵となり味方となり其他色々様

様の作用をして、或時は敵味方互に和合、或時は入亂れて戦ふ。何故なれば上に屢々申す通宇宙の所有形質有る物の数は無量し、それを虚妄報く五官で心に映す心は鏡の如く何が映ることも穢はせねど、映つた影が偽心となつて、報られた數丈作用をする。夫故此偽心の分別は其映つた數の無量よりも増して無量有る何故なれば映つた影丈を受けたままでは居ぬ受けた數の影を幾重にも和合せ、又戦はせるから五官の働よりも幾億倍か多く作用を爲す、それが皆虚妄から出來て居る本性が虚妄で有るから自己が主人となり、召使となり、又敵となり、味方となり、合ふたり、分れたりする其間真心はそれを映つさせて、然かも知らぬ顔をして居る、相手にならぬ親が子供の悪戯を知らぬ顔して見て居ると同じ事である。

そこで心の諸の煩惱も身の所有病も、皆悪戯者等の爲し業で、人間は

此悪戯小僧の玩弄と成つて居る何故なれば人と云ふ身體は矢張形質で、本來の無い一時の幻影、悪戯小僧の住家で有るそれ故身體と云ふ小兒の住む家の内障子は破られ、天井が剝れ、柱が折られ、壘が壊さる、是れを人は病と云ふ、是を如何して修覆らふか薬と云ふ物を以て一時は假に障子の破や、壘の壊されたのを修繕ひはするが、本の如くにはならぬ、扱ては如何して善いか此悪戯兒を謹慎ましむるが最も良善方便である能く之れを戒めて慎むとを習はしむるのである。佛は常々修め習ひ多く修め習へど教へられた彼等悪戯兒等が慎めば寸分の邪氣無く、大慈悲大智慧の主人真心の光、即鏡の本体が現はれる。然らば如何してそうするか。

答へて曰く悪戯兒等を坐はらせる即ち坐つて三摩地に入らしむ。悪戯兒即ち一切煩惱を解脱く三摩地は上に長々と説明しました其

仕方と同じ法に依て障子の破れ天井の剝取即ち形質で成つて居る身體の疾患をも治癒すのです。

病と云ふは右の如く真心に在るのでは無く形質の身體に調はぬ處が起つたので即ち偽心なる悪戯兒が静まれば真心が出て破損たる身體を恢復す偽心悪戯とは人の日も夜も離る能はざる煩悩にしてそれが爲に内に亂想止む時無し此亂想は斷々乎無形真心の亂動では無く物質ある神經の亂動で有る神經の亂動は同じく物質ある血脈の亂動となり血液の中に潮の流が順調居るを攪亂だす血液の順調亂る時は身體の或部分に多量の血液を押し入れ他の部分には血液が少量となる其血の多き處には血液滯滞はりて新陳代謝來ると難きが故に血は自から結滯れて腐敗はこゝに起り病となる此血の結滯は又神經の作用を癡鈍ならしめ又疾患となる。

疾患は斯の如くして起るなり即ち偽心なり妄信なり迷信なり

り物質の欲望物質に對ての迷信なり迷信は亂想となり疾患となる此迷信を脱却して始て亂想を退くるを得亂想退いて神經靜まり血脈の作用順調となつて血液の結滯は流れ既ぎ身體の至る處血の運行平かとなり疾患は忘れられ全く消滅て痕も無し三摩地の功力亦驚くに堪へたり。

三摩地に因て疾患の退却くとを云ふも形ある物質のみに心奪はるゝ人は容易く之れを信けませぬけれども吾は人を欺きません吾は眞信を世に告白ます是に依て永年頑強痼疾に取附かれ百方手を盡しても少しの効驗無く日夜苦みの中に年月を送れる人が俄然疾患を脱却で心身共に健全と成た例は夥しく有ります。

それに就き重ねて申置ます三摩地は身病を治すが專の目的では

三 摩 地

無い幾度も申した通り、一切人は大方皆迷ふて居る。夫が爲病無き健
全な人も病より大なる苦を有て居る。其迷を離れば一切苦を免れ
淨かな心となり、大い慈、大い悲、の佛の大い智、力が顯れて、人より
上の者となるが三摩地の目的で、夫に連て病も治る。心を淨かにせず
病、丈治さんと思ふは大なる誤つた迷で有る。

夫三摩地は斯の如き者で有る。予は斯道に依て無量歡樂を得て居
ます。世の心、身に苦、悶有る人は多く有るから、そ云ふ人々に之を
知らしめ、共に大歡喜を獲んことは吾本願で有りますから、不文な
がら此書を著しました言はんと欲する處は、迎も盡しませせんが他
日を待て、今度は一先ここで筆を擱めます。

修心養身 三 摩 地 終

大正三年十月十五日 印刷
大正三年十月十五日 發行

上定價金壹圓

著者

平井金三

發行者

株式會社 育成會

印刷者

代表者 石川榮司

印刷所

中村政雄

不許複製

■附養地三養修身心■

發行所

東京市本郷區森川町一番地
振替貯金口座東京九三〇八

株式會社 育成會

佛國歩兵中尉エミール、ラ井ッス原著

最新版

佛軍 戰鬥 美談

美裝ポケット形
紙數二百餘頁
定價金四十六錢
郵税金六錢

軍事教育會譯

本原書は佛國陸軍武官が愛國心の養成軍事的知識の普及を計らん爲め一小學校教員を主人公として普佛戰爭安南戰爭の實歴談を面白く述べたるもの、譯文亦親切、丁寧、平易流暢小説の如く讀誦の間に愛國の精神を涵養し、軍事智識を修得するを得べし

歐洲戰亂の由來

美裝ポケット形
紙數百四十頁
定價金參拾錢
郵税金四錢

石川義次先生著

錯雜紛糾せる戰亂の由來を根本に遡り其の大綱を捉へ平易簡明に説明せるものにして、附録として簡明なる年表あり、最近に於ける動亂由來を説けるもの本書を措いて他に無し、我國民たるもの必ず一讀せざるべからず

現代修養叢書

新眞婦人界頭目 木村駒子女史新著

再版發賣

觀自在術

定價一圓廿錢
郵税金八錢

靈界未曾有の珍籍也

本書は木村駒子の自叙傳とも云ふべきものにして、書中最終に觀自在に就て由來及實驗の委曲を盡せり、現代修養叢書第一編として江湖に薦む

故山鹿素行先生遺稿

配所殘筆 附 聖教要錄

定價金三十錢
郵税金六錢

文學士高木武先生著

學校家庭 教訓道話

定價金四十錢
郵税金六錢

石川天崖先生編

科外 聖書 高教遺訓

定價金四十錢
郵税金六錢

發兌 東本郷一川町番地 株式會社 育成會 貯金座 東京 九三〇

發兌 東本郷一川町番地 株式會社 育成會 貯金座 東京 九三〇

1128

現代生活叢書

市川源三先生著

農家の模範的經營

定價金四十錢
郵税金六錢

本書は長野縣の篤農家坂田寅次郎氏の經營法を經て生活問題の實際的研究家市川先生の研究を緯として編著せられたるものにして添ふるに坂田氏廿餘年間の實際米作改良法を以てせり内容は頗る清新適確何人も一本を備ふべし

生江孝之先生著

自治經營美談

定價金一圓
郵税金八錢

本書は内務省の囑託を受け數回歐米各國を巡視し専ら地方改良の事を研究し筆に口に自治改善の事に盡瘁されつゝある生江先生が内外數十の模範を拉し來つて其の經營業績の委曲を縷述されたるものにして内容豊富所説穩健他に比類なき近來の良書なり

齋藤萬吉先生著

農村經營指鍼

定價金廿五錢
郵税金四錢

本書は新道に名高き著者多年の實驗に基き内外幾多の實例を參照して歸納し得たる農村經營の方針眼目にして記事簡明・論旨直截・得易からざる農村の好指鍼たるのみならず補習學校青年夜學會用讀本としても亦頗る適切なり

東京本郷一丁目森川番地株式會社 發行
育成會 振替貯金口座東京九〇三八

終